

# 仏説観無量寿經

ぶっせつかんむりようじゅきょう

○は調声(リーダー)が読む。●より一緒に読む。

合掌・礼拝・経本を頂く キン二打

三奉請

ぶじょうみ だ によらいにうどうじょう さんげらく

○奉請弥陀如來入道場●散華樂

「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」

阿弥陀如來、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

○奉請釈迦如來入道場●散華樂

「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」

釈迦如來、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

○奉請十方如來入道場●散華樂

「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」「一」

十方如來、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

キン一打 作相 キン二打 表白 キン一打

全ての仏方、法要の準備が整いました。花を降らしお迎えします。

○ 仏説觀無量壽經

宗の時代(五世紀前半)に畠良耶舎が建康(南京)にて訳す  
そゝ  
きょうりょうやしや  
けんこうなんきん

宋元嘉中畧良耶舍訣

# 序分 証信序・・・お經の内容を証明する

●如是我聞・  
に  
よ  
せ  
が  
も  
ん

私は、このように聞きました。

# 序分 発起序 化前序

・・・お釈迦様が待機されている場所を説明する

いちじぶつざいおうしやじようぎしやくせんじゆよだいびくしゅせんにひやくじゆうにんくぼさつさんまんにせんもんじゅしりほうおうじ  
一時仏在王舍城・耆闍崛山中・与大比丘衆・千二百五十人俱・菩薩三万二千・文殊師利法王子・

お駕廻様がマガダ国首都王舍城の近くの耆闍崛山においてになり、一二五〇人の弟子たちとおられました。

而為上首：

また、文殊菩薩をはじめとして、三万二千人の菩薩もおられました。

序分 発起序 禁父縁 … 王舍城で王子が父頻婆娑羅を幽閉する

にじおうしゃだいじょう ういちたいし みょうあじやせ ずいじゅんじょうだつ あくうしきふる しゅしゅぶおう びんばしゃら ゆへいちお しちじゅう  
爾時王舍大城・有一太子・名阿闍世・隨順調達・惡友之教・収執父王・頻婆娑羅・幽閉置於・七重

おうしゃじょう あじやせ

だいばだつた

びんばしゃらおう

重に囲われた牢獄に閉じ込めました。

室內・制諸群臣・一不得往・國大夫人・名韋提希・恭敬大王・澡浴清淨・以酥蜜和麩・用塗其

家臣に命じ、誰も王に会うことを許しませんでした。妃の韋提希夫人は、王の身を案じ、自分の身体を洗い清め、

小麦粉に蜂蜜や牛乳を発酵させたものを練り混ぜて、自らの身体に塗り、

身・諸瓔珞中・盛蒲桃漿・密以上王・爾時大王・食麩飲漿・求水漱口・漱口畢已・合掌恭敬・

胸飾りには、どうの汁を入れ、密かに王のもとに行き、それらを差し上げました。王は食し、水で口を濯いでから、  
向耆闍崛山・遙礼世尊・而作是言・大目犍連・是吾親友・願興慈悲・授我八戒・時目犍連・

耆闍崛山の方を向き、合掌し、お釈迦様に礼拝をして言いました。「目連尊者は我が親友です。どうかお慈悲によつ

て、私に八戒をお授けになり、一日一日を安らかに過ごせるようにしてください。」その時、目連尊者は

如鷹隼飛・疾至王所・日日如是・授王八戒・世尊亦遣・尊者富一樓那・為王說法・如是時間・經

はつさいかい

もくれんそんじや

じひ

もくれんそんじや

きょう

によせじけん

きょう

はつさいかい

鷹や隼が飛んできたかのようすぐに王のもとに現れました。そして、毎日毎日八斎戒を授けました。また、お

釈迦様は説法一番の富樓那尊者を遣わして、王の為に仏法を説かせました。

三七日・王食麩蜜・得聞法故・顏色和悦・

三週間が過ぎ、王は食事もでき、仏法を聞くことができたので生き生きとし悦びに満ち溢れていました。

序分 発起序 禁母縁  
・・・母韋提希が軟禁される

阿闍世王は門番に聞きました。「父はまだ生きているのか。」門番は答えました。「韋提希様が密かに食べ物を与えておられます。また、目連尊者や富樓那尊者が空からやつてきて王に仏法を説いておられます。私などではお止め

あじやせおう

王・沙門目連・及富樓那・從空而來・為王説法・不可禁制・時阿闍世・聞此語已・怒其母曰・我母

あじやせおう

する一ことはできません。」阿闍世王はこれを聞くと激怒しました。「母は賊である。

是賊・与賊為伴・沙門惡人・幻惑呪術・令此惡王・多日不死・即執利劍・欲害其母・時有一臣・名

せぞく よぞくいはん しゃもんあくにん けんなくしりじゆつ りようしあくおう たにちふし そくしりりけん よくがいごも じういっしん みよう

賊の味方をする尊者達も悪人である。幻惑の呪術を用いて父を何日も生かしておくとは。」阿闍世王は剣を取り、母を殺そつとしました。その時、聰明で知識がある

わつがつこう そうみょうたち きゅうよきば いおうきらい びやくこんだいおう しんもんび たろんぎょううせつ うしょあくおう どんごくい こせつ  
曰月光・聰明多智・及与耆婆・為王作礼・白言大王・臣聞鬼一陀論終説・有諸惡王・貪国位故・殺  
がつこう さばだいじん あじやせおう  
月光という大臣が耆婆大臣と共に阿闍世王に礼をしてから言いました。「王様、私共の知るところによりますと、

古より多くの悪王が生まれ、王位を乗つ取ろうと父を殺害した者は

がいごぶ いちまんはせん みぞうもんぬ むどうがいも おうこんいし せつさやくしじ おせつりしゅ しんぶにんもん せせんたら  
害其父・一万八千・未會聞有・無道害母・王今為此・殺逆之事・汚刹利種・臣不忍聞・是栴陀羅・

一万八千人には及びます。しかし、未だ母を殺した者は聞いたことがありません。今、王様が母君を殺めるというのであれば、大変な汚れとなりましよう。聞くに堪えません。人間のすることではありません。

ふきじゅし じにだいしん せつしこきょう いしゆあんけん きやくざよう にたい じあじやせ こうざばごん によふいがや さばびやく  
不宜住此・時ニ大臣・說此語竟・以手按劍・却行而退・時阿闍世・告耆婆言・汝不為我耶・耆婆白

もはやこにいはできません。」大臣達は、剣に手を添えながら、ジリジリと後ずさりをしました。阿闍世王

は驚いて耆婆大臣に言いました。「お前は私のものを離れるのか」耆婆大臣は答えました。

こんだいおう しんまくがいも おうもんし こさんげぐく そくべんしゃけん しふがいも ちよくこないかん へいちじんぐ ふりよう ぶすい  
言大王・慎莫害母・王聞此語・懺悔求救・即便捨劍・止不害母・勅語内官・閉置深宮・不令復出・



だいもっけんれん きゅういあなん じゆくにらい ぶつじゅきしゃくせんもつ おおうぐしゅ じいだい らいこす けんせんしゃ  
大目犍連・及以阿難・從空而來・仏從耆闍崛山沒・於王宮出・時韋提希・禮已拳頭・見世尊・韋

もくれんそんじや あなんそんじや ざしゃくせん

いだい けぶにん

目連尊者と阿難尊者を遣わし、<sup>レ</sup>自身も耆闍崛山から王宮においてになりました。韋提希夫人が頭を上げると、  
かむ にぶつしんしこんじき さひやっぽうれんげ もくれんじさ あなんさいう しゃくばるこ せしょてん さいこくうじゅう ふうてんね  
迦牟尼仏・身紫金色・坐百宝蓮華・目連侍左・阿難在右・韋梵護世諸天・在虛空中・普雨天華・

そこにはお釈迦様がおられました。お体は金色に光り輝き、宝玉の蓮華にお座りになられ、左に目連尊者を、右

あなんそんじや

こんじさ ほんてん してんのう

に阿難尊者をお従えになられました。帝釈天や梵天や四天王達は空中におられ、花を降らして

持用供養・時韋提希・見仏世尊・自絶瓔珞・拳身投地・号泣向仏・白言世尊・我宿何罪・生此

くよう

しゃか いだい けぶにん しゃか

供養をされました。韋提希夫人はお釈迦様を見ると、自ら飾り物を捨て、手足を地につけ、泣きながらお釈迦様

に申し上げました。「お釈迦様、私は一体何の罪があつて

あくし せそんぶう がどういんねん よだい ばだつた ぐ い けんぞく

悪子・世尊復有・何等因縁・与提婆達多・共為眷属・

このような悪い子を産んだのでしょうか。お釈迦様もまた、何の因縁で提婆達多とご親戚なのでしょうか。

序分 発起序 欣淨縁・・・韋提希が極樂淨土を願う

ゆいがんせそん いがこうせつ むうのうしょ がどうおうじよ ふきょうえんぶたい じょくあくせや じょくあくしょ じこくがき ちくしょよう  
唯願世尊・為我廣說・無憂惱歎・我當往生・不樂閻浮提・濁惡世也・此濁惡歎・地獄餓鬼・畜生盈

どうかお釈迦様、私の為に悩みのない世界を教えて下さい。私はその世界に生まれたい。この濁りの世を離れたいの  
です。この世は地獄・餓鬼・畜生のよくな

まんたふぜんじゅ がんがみらい ふもんあくしよう ふけんあくにん こんこうせそん ごたいどうじ ぐあいさんけ ゆいがんぶつにち  
満・多不善聚・願我未來・不聞惡声・不見惡人・今向世尊・五体投地・求哀懺悔・唯願仏日・

罪を犯し、欲にまみれている者で満ち溢れています。私はもう二度とこれらの声を聞いたり姿を見たくありません  
ん。今、お釈迦様に私の全てを持つて礼拝し、お慈悲を請います。

しようじゅうじょ にじせそん ほうみけんこう ごこうこんじき へんじゅうじっぽう むりようせかい げんじゅぶつちよう けいこんだい によ  
清淨業處・爾時世尊・放眉間光・其光金色・徧照十方・無量世界・還住仏頂・化為金台・如

どうか清らかな世界をお見せください。」その時お釈迦様の眉間の白毫から金色の光が放たれました。すべての世  
界を照らし、お釈迦様の頭の上に戻り、金色の台と成りました。それは世界の中心にそびえる

しゆみせん じっぽうしょぶつ じょうみようこくど かいおちゅうげん わくうこくど しつぼうごうじょう ぶうこくど じゅんせれんげ ぶうこくど  
須弥山・十方諸仏・淨妙国土・皆於中現・或有国土・七宝合成・復有国土・純是蓮華・復有国土・

しゆみせん  
須弥山の様です。そこに、すべての清らかなみ仏の国々が現れました。七つの宝でできた国、蓮の花で満ちた国、  
によじさいでんぐ ぶうこくど によはりきよう じっぽうこくど かいおちゅうげん うによせとう むりようしょぶつこくど こんけんかかん  
如自在天宮・復有国土・如玻瓈鏡・十方国土・皆於中現・有如是等・無量諸仏国土・嚴頭可觀・

たけじさいてん  
他化自在天の宮殿のような国、水晶の鏡のような国など様々です。み仏の国の美しさをお見せになつたのです。

りょういたいけんじいたいけ びやくぶつこんせん せしよぶつど すいぶしょうじよう かいうちうこうみよう がこんきようしおう こくらくせかい  
令韋提希見・時韋提希・白仏言世尊・是諸仏土・雖復清淨・皆有光明・我今樂生・極樂世界・

韋提希夫人は申し上げました。「お釈迦様、み仏の世界は清らかで光で満ちていますが、その中でも極樂世界の  
あみだぶつしよ ゆいがんせん きょうがしゆい きょうがしゆうじゆ ほとけ

阿弥陀仏所・唯願世尊・教我思惟・教我正受・

阿弥陀仏の所に生まれたい。どうか私に極樂世界を想う方法を教え、お徳を受ける方法を教えて下さい。」

## 序分 発起序 散善願行縁・・・極樂へ生まれる方法をおおまかに説く

爾時世尊・即便微笑・有五色光・從仏口出・一一光照・頻婆娑羅頂・爾時大王・雖在幽閉・心眼無

これを聞いたお釈迦様は微笑まれ、口から五色の光が放たれ、その一つ一つが頻婆娑羅王の頭を照らしました。そ

の時の大王は幽閉されていましたが、心の眼で

障・遙見世尊・頭面作礼・自然增進・成阿那含・爾時世尊・告韋提希・汝今知不・阿弥陀仏・

遠くのお釈迦様を見ることができ、頭を地につけ礼拝しました。そして自ずと迷いの世には戻らない位に至つたので

す。その時、お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。「そなたは知つているか。阿弥陀仏は

去此不遠・汝當繫念・諦觀彼國・淨業成者・我今為汝・廣說衆譬・亦令未來世・一切凡夫・欲修淨

遠くにいるわけではない。そなたは心を集中して、極楽淨土の阿弥陀仏を心に映し出すのだ。私はそなたの為に、10

その方法を説く。また、未来に清らかな行を願う者たちを

業者・得生西方・極楽國土・欲生彼國者・當修三福・一者孝養父母・奉事師長・慈心不殺・修

西方極樂淨土に生まれさせよう。

極楽に生まれたい者は、三つの善い行いをするがよい。一つは、親孝行をし、師や

年上によく仕え、優しさを持つて生き物を殺さず、怒らず、盜らず、飲まずなどの十の善い行いを行うこと。

二つは仏法僧の三帰依をし、戒を守り、行いを正しくすること。三つは、悟りを求める心を起こし、因果を深く信

じ、大乗の經典を読み、人々に勧めること。

如<sup>し</sup>此<sup>し</sup>三事・名為淨業・仏告韋提希・汝今知<sup>し</sup>不<sup>ふ</sup>・此<sup>し</sup>三種業・過去未來現在・三世諸仏・淨業正因・

これらを善き行いと言うのだ。」続けてお釈迦様は言われました。「そなたは知っているか。これらの行いは過去現在

未来の仏がたの正しい行いであり、み仏になる方法なのだ。」

(ほどけ)

序分 発起序 定善示觀縁・・・極楽淨土を見る方法を説く

じょぶん ほつきじよ じょうせんじかんえん

ほつきじよ

じょぶん

さよう

べくらくじょうど あみだぶつ

仏告阿難・及韋提希・諦聽諦聽・善思念之・如來今者・為未來世・一切衆生・為煩惱賊・說清淨

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「しっかりとよく聞いて、これを念じなさい。私は今、煩惱に

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「しっかりとよく聞いて、これを念じなさい。私は今、煩惱に

悩む未来のすべての者の為に清らかな行を説く。

業・善哉韋提希・快問此事・阿難汝當受持・廣為多衆・宣說仏語・如來今者・教韋提希・及

いだいけぶにん

善いぞ韋提希夫人、よく尋ねてくれた。阿難よ、私が説く教えを覚え、多くの者たちの為に広めるがよい。私は

いだいけぶにん

今、韋提希夫人と未来のすべての者たちが、

みらいせ いつさいしゅじょう かんのさいぼう ごくらくせかい いぶつりっこ どうとくひん しょつじょうにくと によしゅうみよつまよう じけんめんぞう

未来世・一切衆生・觀於西方・極樂世界・以佛力故・當得見彼・清淨國土・如執明鏡・自見面像・

さいほうごくらくせかい

ほどけ

西方極樂世界を觀れるようにしてよう。み仏の力で清らかな世界を見ることができるのだ。くもりのない鏡で自分の姿を映し出すように。

けんびこくと こくみようらくじ しんかんきこ おうじそくとく むしょうぼうにん ぶつこういだい によせほんぶ しんそうるいれつ みとく

見彼國土・極妙樂事・心歡喜故・應時即得・無生法忍・仏告韋提希・汝是凡夫・心想羸劣・未得

ごくらくじょうど

極樂淨土の素晴らしい景色を見て、歡喜し、悟りを得るであろう。」お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。

ほんのう

「そなたは弱い人間だ。煩惱があり、すべてを見通す天眼通を得ていなから、

てんげんづう

かんざ

しゃか いだいけぶにん

天眼・不能遠觀・諸仏如來・有異方便・令汝得見・時韋提希・白仏言世尊・如我今者・以仏力故・  
てんげん ふのうおんかん しょぶつによらい ういほうべん りょうによどっけん じいだいけ びやくぶつこんせせん によがこんじや いぶつりつこ

遠くを觀ることができない。しかし、み仏は様々な手段を持つてゐるから、そなたは見えるようになる。」韋提希  
ほとけ

夫人はお釈迦様に申し上げました。「お釈迦様、私は今、み仏のお力で

けんひこくと にやくぶつめつご しょしゃじょうどう じょくあくふせん こくしおひつ うんがどうけん あみだぶつ こくらくせか  
見彼國土・若仏滅後・諸衆生等・濁惡不善・五苦所逼・云何當見・阿彌陀仏・極樂世界・

極樂淨土を見れました。しかし、あなた様がこの世を去られた後の人々は、悪い行いはしても善い行いはせずに苦しむでしよう。そうなればその者たちはどうやって阿彌陀仏の極樂淨土を見ることができるのでしょうか。」

## 正宗分 定善 日想觀・・・夕日を見る

ぶつこういだいけ によぎゅうしゅじょう おうどうせんしん けねんいつしょ そうおさいほう うんがさそう ほんさせうしゃ いつさいしゅじょう  
仏告韋提希・汝及衆生・应当專心・繫念一處・想於西方・云何作想・凡作想者・一切衆生・

しゃか いたいけぶにん さいほう  
お釈迦様は韋提希夫人に仰せられました。「そなたや未来の人々は、ひたすら西方を想いなさい。その方法は、

じひしようもう うもくしこ かいもくにもつ とうきそうねん しょうざざじこう たいかんおにち りょうしんけんじゅ せんそうふ い けん  
自非生育・有目之徒・皆見日没・當起想念・正坐西向・諦觀於日・令心堅住・專想不移・見

日欲沒・狀如懸鼓・既見日已・閉目開目・皆令明了・是為日想・名曰初觀・  
ひょくもつ じょうにげんく きけんにつち へいもくかいもく かいりょうもうりょう ぜいにつそう みょうわうしょかん  
目が見える限り、日没を見なさい。姿勢を正して西に向かい、夕日を心に思い描きなさい。心を集中したならば、

いだいけ

夕日が沈むときの太鼓のような姿を観なさい。それが見終わり、目を閉じても開いても夕日が見えるようになれば、これを日想といい、最初の観と名付ける。

## 正宗分 定善 水想観

次作水想・見水澄清・亦令明了・無分散意・既見水已・當起水想・見氷映徹・作瑠璃想・此想成  
次は水想観だ。清く澄み切った水を見て集中しなさい。それが終わったら、その水が氷となつたことを想い浮かべ、澄み切つた氷を見て宝玉の瑠璃を想いなさい。それが終わったら

己・見瑠璃地・内外映徹・下有金剛・七宝金幢・擎瑠璃地・其幢八方・八楞具足・一一方面・百

瑠璃の大地が透き通つてゐるのを見なさい。大地の下には七つの宝で飾られた金の柱があり、大地を支えている。その柱は八角形で、それぞれの面が

宝所成・一一宝珠・有千光明・一一光明・八万四千色・映瑠璃地・如億千日・不可具見・瑠璃

百の宝で飾られている。それぞれの宝は千の光を放ち、それぞれの光は八万四千の色があり、それらが瑠璃の大地に映るので、億千の太陽のようで、見ることができない。瑠璃の大地の上には、

地上・以黃金繩・雜廁間錯・以七寶界・分齊分明・一一寶中・有五百色光・其光如華・又似星月。14

黄金の道が縦横に通じ、境界は七つの宝でできている。それぞれ五百の光を放ち、花や星や月のようでもある。

懸處虛空・成光明台・樓閣千万・百寶合成・於台兩邊・各有百億華幢・無量樂器・以為莊嚴・八種

それらが空中で光の台となり、千萬の樓閣があり、百の宝でできている。台の兩側には、百億の幡や數え切れない樂

器が飾られている。八種の清らかな風や光が出て、

清風・從光明出・鼓此樂器・演說苦空・無常無我之音・是為水想・名第二觀。

これらの樂器を鳴らすとみ仏の教えが響くのである。これを水想觀といい、第二の觀という。

正宗分 定善 地想觀  
・・・極樂の大地を見る

此想成時・一一觀之・極令了了・閉目開目・不令散失・唯除睡時・恒憶此事・如此想者・名為粗  
これができたなら、それぞれを想い、はつきりと見えるようにしなさい。目を閉じても開いても消えないように、眠つ  
ている時以外は常に想いなさい。これができるとほほ極樂淨土を見たことになる。

見・極樂國地・若得三昧・見彼國地・了了分明・不可具說・是為地想・名第三觀・仏告阿難・汝持

もしさらに集中する三昧の境地に入れば、もつと鮮明に見ることができ。しかし、それは細かく説くことができない。「これを地想観といい、第三の観と名付ける。」お釈迦様は阿難尊者に仰せになりました。「そなたは、ちそくかん さんまい しゃか あなんそんじや い。」

仏語・為未來世・一切大衆・欲脱苦者・說是觀地法・若觀是地者・除八十億劫・生死之罪・捨身他

私の言葉をよく覚えて、苦しみを抜け出したい未来の者たちの為に、極楽淨土の大地を想う法を説くのだ。も

し、観ることができたならば、八十億劫の迷いの罪が消えて、命が尽きた時

世・必生淨國・心得無疑・作是觀者・名為正觀・若他觀者・名為邪觀・

必ず極樂淨土に生まれる。決して疑つてはならない。これを正觀と名付ける。そうでないなら邪觀と名付ける。

正宗分 定善 宝樹觀・・・極樂の樹を見る

仏告阿難・及韋提希・地想成已・次觀寶樹・觀寶樹者・一一觀之・作七重行樹想・一一樹高・八千

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「地想觀が終われば、次に極樂淨土の宝の樹を想いなさい。

宝の樹を想うには、まず一つ一つの樹を観て、それが七重の並木に並ぶのを想いなさい。それぞれの樹の高さは八千  
由旬・其諸宝樹・七宝華葉・無不具足・一一華葉・作異宝色・瑠璃色中・出金色光・玻瓈色中・出

由旬である。それぞれの樹の花や葉も七つの宝でできている。花や葉は、それぞれ違う色をしている。瑠璃色のものは金色の光を放ち、玻璃色のものは

ぐしつこう めのうしきちゅう すいしゃここう しゃこしきちゅう すいろくしんじゅこう さんここはく いつさいしゅぼう いいようじき みょうしんじゅ  
紅色光・碼碭色中・出碑碟光・碑碟色中・出綠真珠光・珊瑚琥珀・一切衆宝・以為映飾・妙真珠

紅の色を放ち、瑪瑙のものは蝦蛄の光を放ち、蝦蛄色のものからは綠真珠の光を放ち、珊瑚や琥珀などのすべての宝玉がそれぞれ光を放っている。また樹の上は真珠でできた

もう み ふ じゅじょう いちいちじゅじょう う しちじゅうもつ いちいちもうけん う こひやくおく みよう けくでん によほんのうぐ しょてんどうじ じねん  
網・弥覆樹上・一一樹上・有七重網・一一網間・有五百億・妙華宮殿・如梵王宮・諸天童子・自然

網で覆われている。それぞれの樹に七重の網が重なっている。それぞれの網の間には五百億の花で飾られた宮殿があり、それは梵天の宮殿のようである。そこには天の童子がいて、

ざべちゅう いちいちどうじ ごひやくおく しゃかびりようがま にほう い ようらく ご まにこう しょうひやく ゆじゅん ゆによわごう ひやくおく  
在中・一一童子・五百億・欝迦毘楞伽摩尼宝・以為瓔珞・其摩尼光・照百由旬・猶如和合・百億

それぞれ五百億の宝玉が飾られた胸飾りを身につけている。その宝玉の光は百由旬を照らす。それは百億の

にちがつ ふ かぐみよう しゅうぼうけんざく しきちゅうじゅうしゃ し しょほうじゅ こうこうそうどう ようようそうし お しりょううけん しょしおみようけ  
日月・不可具名・衆宝間錯・色中上者・此諸宝樹・行行相當・葉葉相次・於衆葉間・生諸妙華・

月や太陽を合わせたようで言葉にできない。それぞれの色が見事に彩られ、ただただ美しい。これらの樹々は相対するよう列をなし、葉も整然とし、花もよく整っている。

華上自然・有七宝果・一一樹葉・縱廣正等・二十五由旬・其葉千色・有百種画・如天瓔珞・有衆

花の上には七つの宝でできた実がある。それぞれの葉は縱も横も二十五由旬であり、その葉には千の色と百の模様

がある。それは天の飾りのようだ。

妙華・作閻浮擅金色・如旋火輪・婉轉葉間・涌生諸果・如帝釈瓶・有大光明・化成幢旛・無量宝

それぞれの花は金色に輝き、火の輪のように葉を巡る。帝釈天の瓶のように果実が湧く。その実は大いなる光を放

ち、幡や数え切れないほどの宝の台となる。

蓋・是宝蓋中・映現三千・大千世界・一切仏事・十方仏國・亦於中現・見此樹已・亦當次第一一

それらの中にあらゆるみ仏の事や國が映し出される。このように極樂の樹を想い描いたならば、その姿を一つ一つ観之・観見樹莖・枝葉華果・皆令分明・是為樹想・名第四觀。

順々に想い描きなさい。樹の幹、枝葉、花や実をはつきりと観なさい。これを樹想といい、第四の觀と名付ける。

# 正宗分定善宝池観・・・極楽の池を見る

18

しどうそうすい そうすいしゃ こくらつこくど うはつちすい いちいち ちすい しつぼうしょじよ ごほうにゅうなん じゅによいしゃおうしょ ふんに  
次当想水・想水者・極樂國土・有八池水・一池水・七宝所成・其宝柔軟・從如意珠王生・分為  
くらくじよど

きらめき、實に滑らかだ。その水は最もすぐれた如意宝珠より湧き出でいる。その水はやがて

十四支・一・支・作七宝色・黃金為渠・渠下皆以・雜色金剛・以為底沙・一・水・中・有六十億・

十四の支流となり、それぞれが七つの宝の色できらめいている。その水路は黄金でできていて、底には色鮮やかな砂

が敷かれている。それぞれの水の中には、六十億の

七宝蓮華・一・蓮華・圓・正等・十二・由旬・其摩尼水・流・注・華間・尋・樹・上・下・其・声・微妙・演・說・苦

七つの宝でできた蓮華が咲いていて、それぞれの蓮華は丸くふつくらしてて、大きさは十二・由旬である。宝珠から

湧き出た水はそれらの花の間を流れ、樹々を巡る。そのせせらぎは、苦・

空・無常無我・諸波羅蜜・復有讚歎・諸仏相好者・如意珠王・涌出金色・微妙光明・其光化為・百  
く むじよ む が しよ ふう しよ ふう みよ えんせつ  
く むじよ む が しよ ふう さん しよ ふう そう こ う しよ に よい しり おう ゆすい こんじき みみよ う こ う みよ ご こ う け い ひやつ  
く むじよ む が ろっぱら しよ じゆ こんじき

宝色鳥・和鳴哀雅・常讚念佛・念佛念僧・是為八功德水想・名第五觀。

はくくどくすいそう

はくくらくじょう

かん

## 正宗分 定善 宝樓觀・・・極樂の樓閣を想う

色の鳥となり、心に響く声で鳴き、仏法僧を念ずることを讚える。これを八功德水想といい、第五の觀と名付ける。

衆宝国土・一界上・有五百億・宝樓閣・其樓閣中・有無量諸天・作天伎樂・又有樂器・懸處虛

これらの諸々の宝でできた国土の各地に、五百億の宝の樓閣がある。その樓閣の中に数え切れない天人達がいて、素晴らしい音楽を奏でる。また、空中に樂器が浮いていて、

空・如天宝幢・不鼓自鳴・此衆音中・皆說念佛・念佛念比丘僧・此想成已・名為粗見・極樂世界。

兜率天の宝幢神の樂器のように、誰も弾かなくても自ずと音を奏でる。これらの音は仏法僧を念ずることを説いている。この想ができたなら、ほぼ極樂淨土の

宝樹宝地宝池・是為總觀想・名第六觀・若見此者・除無量億劫・極重惡業・命終之後・必生彼國・

樹や大地や池を見たと言えよう。これを總觀想といい、第六の觀と名付ける。もし、これを見れば、計り知れない極重の悪い行いが除かれ、命が尽きた後に必ず極樂淨土に生まれる。

させかんしゃみょういしょうかんにやくたかんしゃみょういじやかん  
作是觀者・名為正觀・若他觀者・名為邪觀・

「この觀を正觀といい、そうでない觀は邪觀と言つのだ。」

## 正宗分 定善 華座觀

### ・・・阿彌陀仏が空中に現れる

ぶつこうあなんきゅういだいけたばちゅうたばちゅうせんしんねんしぶつどういによふんべつけせつじょくのうぼうによとうおくじこういだい  
仏告阿難・及韋提希・諦聴・諦聴・善思念之・仏當為汝・分別解說・除苦惱法・汝等憶持・廣為大

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「よく聽けよく聽け、よくこれを念じてくれ。私はそな

たたちの為に苦惱を除く方法を説く。そなた達はよく覚えて広く人々の為に

しゃうふんべつけせつせつせごじむりょうじゅぶつじゅりゅうくじゅうかんせおんだいせいしそにだいしじりゅうさうこうみょう  
衆・分別解說・說是語時・無量壽仏・住立空中・觀世音・大勢至・是二大士・侍立左右・光明熾

説き広めるのだ。」こう言われた時、阿彌陀仏が空中でお立ちになられました。左右には觀世音菩薩と大勢至菩薩が付き従つていました。光明はまばゆく、

じょうふかぐけんひやくせんえんだんごんじきふとくいひじいたいけけんむりょうじゅぶつせつそくさらいびやくぶつこんせそんが  
盛・不可具見・百千闇浮擅金色・不得為比・時韋提希・見無量壽仏已・接足作禮・白仏言世尊・我

見ることができません。百千の金色も比べものになりません。韋提希夫人は阿彌陀仏を拝見し、お釈迦様の足に頭

をつけ礼拝をしました。そして韋提希夫人は申し上げました。「お釈迦様、私は

今因仏力故・得見無量寿仏・及ニ菩薩・未來衆生・當云何觀・無量寿仏・及ニ菩薩・仏告韋提希・

今、あなたのお力で阿弥陀仏と二人の菩薩を拝見することができました。未來の人々はどうやって見ることができるのでしようか。」お釈迦様は韋提希夫人に仰せになりました。

欲觀彼仏者・當起想念・於七寶地上・作蓮華想・令其蓮華・一一葉・作百寶色・有八万四千脈・

「無量寿仏を拝見したい者は、これらを思い描くがよい。七つの宝の大地の上に、蓮華を想い浮かべ、花びらが一枚一枚百の宝の色で輝いていると想つがよい。また八万四千の筋があり、

猶如天画・脈有八万四千光・了了分明・皆令得見・華葉小者・縱廣二百五十由旬・如是蓮華・

天の絵のようである。筋には八万四千の光があり、それらを一つ一つはつきりと見ることができるようにするのだ。

花びらは小さいものでも縦横二百五十由旬である。このような蓮華に

有八万四千葉・一一葉間・各有百億・摩尼珠王・以為映飾・一一摩尼・放千光明・其光如蓋・七宝

八万四千の花びらがついている。花びらと花びらの間には百億の宝玉で飾られている。それぞれの宝玉が千の光を放つている。その光は七つの宝でできた天蓋のように、

こうじょう へんぶじじょう しゃかびりよう がほう いい こだい しれんげだい はちまんこんこう けんしゆくかほう ほんまにほう みようしんじゅ 22

合成・偏覆地上・釈迦毘楞伽宝・以為其台・此蓮華台・八万金剛・甄叔迦宝・梵摩尼宝・妙真珠  
地上をくまなく覆つてゐる。釈迦毘楞伽宝は蓮華の台となり、八万の金剛宝や甄叔迦宝や梵摩尼宝や真珠の網で  
網・以為交飾・於其台上・自然而有・四柱宝幢・一一宝幢・如百千万億・須弥山・幢上宝幔・如夜

飾られている。その台の上に四本の宝柱がある。それぞれ百千万億の須弥山を重ねたように高い。その上の宝の幕は

摩天宮・有五百億・微妙宝珠・以為映飾・一一宝珠・有八万四千光・一一光・作八万四千・異種

夜魔天のようだ。五百億の素晴らしい宝玉で飾られている。それぞれの宝玉は八万四千の光を放ち、それぞれの光

は八万四千の違う

金色・一一金色・偏其宝土・处处变化・各作異相・或為金剛台・或作真珠網・或作雜華雲・於十方

金色に輝いてゐる。それぞれの金色は宝の大地に満ち、いたるところで様々な姿となる。金剛の台となつたり、あるいは真珠の網となり、あるいは様々な花の雲となる。あらゆる方向において、

面・随意变现・施作仏事・是為華座想・名第七觀・仏告阿難・如此妙華・是本法藏比丘・願力所

ほとけ

けざそう

かん

しゃか

あなんそんじや

思いのままに変化しみ仏のはたらきを表す。これを華座想といい第七の觀と名付ける。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。「これらの花は、法藏菩薩の願力により出来上がったのだ。

成・若欲念彼仏者・當先作此華座想・作此想時・不得雜觀・皆應一一觀之・一一葉・一一珠・

もし、阿弥陀仏を想い描きたいと願うならば、まず、この華座想をしなさい。これをするとどこには、雜に行つてはならない。皆一つ一つ丁寧に観ていかねばならない。一つ一つの花びら、一つ一つの宝玉、

一一光・一一台・一一幢・皆令分明・如於鏡中・自見面像・此想成者・滅除五万劫・生死之罪・

一つ一つの光、一つ一つの台座、一つ一つの柱を丁寧に描いて、鏡に自分の姿が映し出されたようにはつきりと想い描かねばならない。これができれば、五万劫の迷いの罪が消え、

必定當生・極樂世界・作是觀者・名為正觀・若他觀者・名為邪觀・

必ず極樂淨土に生まれることが出来る。この觀を正觀といい、できなければ邪觀といふ。」

正宗分 定善 像觀・・・阿弥陀仏の像を想う

仏告阿難・及韋提希・見此事已・次當想仏・所以者何・諸仏如來・是法界身・入一切衆生・心想

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。これが終われば、次にみ仏を想い描きなさい。何故なら  
24

ほ  
と  
け

あらゆるみ仏は自在に動き姿を変える。すべての人々の心にも表れよう。

中・是故汝等・心想仏時・是心即是・三十二相・八十隨形好・是心作仏・是心是仏・諸仏正徧知  
じゅう ぜ こ に よ う しん そ う ぶ つ じ せ しん そく せ さん じゅう う に そ う は ち じゅう す ば ぎ う こ う せ しん さ ぶ つ せ しん せ ぶ つ しょ ぶ つ しょ う へん ち

だから、そなたらが心にみ仏を想う時、その心はみ仏の特長である三十二相と八十隨形好であり、その心はみ仏となり、その心はみ仏である。み仏の海のように深い智慧で表れてくださらる。

だから集中して阿弥陀仏をはつきりと想い描くのだ。阿弥陀仏を想い描くには、

どうぞうぞう へいもくかくもく けんへちほうぞう によえんぶ だんごんじき さ ひけじよう けんぞうざい しんげんとつかへりょうりよつぶんみよう けんごくらう  
当想像・閉目開目・見一宝像・如閻浮擅金色・坐彼華上・見像坐已・心眼得開・了了分明・見極樂  
まず像を想い描くのだ。目を閉じても開いても、金色に輝く仏像が蓮の花の上に座つておられるのを見るがよい。そ  
れが出来ると心の目が開いて、極樂淨土の

七つの宝でできた大地や池や並木を見て、その上に宝の幔幕が覆い、大空には宝の網が覆われているのをはつきりと

見るであろう。自分の手の中にあるかのようにはつきりと見えるようにするのだ。これが終われば、蓮華を今度は阿弥陀仏の左側に想い浮かべよ。前の蓮華と同じ形と大きさだ。そして今度は阿弥陀仏の右辺・想一觀世音菩薩像・坐左華座・亦放金光・如前無異・想一大勢至菩薩像・坐右華右側に蓮華を想い浮かべよ。左の蓮華の上には觀世音菩薩の像がお座りになり、阿弥陀仏と同じく金色の光を放つているのを想い浮かべよ。右の蓮華の上には大勢至菩薩の像がお座りなるのを想い浮かべよ。

蓮華があつて、その蓮華の上には仏像一体と

この觀が出来ると、これらの像は光を放つ。その光は金色で、宝の樹々を照らす。それぞれの樹の下にはまた三つの座・此想成時・仏菩薩像・皆放光明・其光金色・照諸宝樹・一一樹下・復有三蓮華・諸蓮華上・各

蓮華二体がお座りになり、極樂淨土に満ちている。この想が出来ると、極樂淨土のせせらぎや光、宝の樹や鴨や雁や鴛鴦が仏法を説くのを聞くことが出来る。

出定入定・恒聞妙法・行者所聞・出定之時・憶持不捨・令与修多羅合・若不合者・名為妄想・若26

その觀に入つたときから出るときまで、ずっと仏法が聞けるのだ。行者が聞いたことは、觀が終わつても忘れないよう

にし、經典と照らし合わせてみよ。もし合わなければそれは妄想である。もし合えば、

有合者・名為麁想・見極樂世界・是為想像・名第八觀・作是觀者・除無量億劫・生死之罪・於  
ほぼ極樂淨土を見たと言える。これを像想といい、第八の觀と名付ける。この觀ができれば、無量億劫の迷いの罪が  
げんしんじゅう とくねんぶつさんまい

### 現身中・得念佛三昧・

消え、この身のままで念佛三昧に入ることができる。」

### 正宗分 定善 真身觀

・・・阿彌陀仏の真のすがたを想う

仏告阿難・及韋提希・此想成已・次當更觀・無量壽仏・身相光明・阿難當知・無量壽仏身・如百千

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「この觀ができたならば、次は更に阿彌陀仏の身体と光

を想い描くがよい。阿難よ、よく知つていなさい。阿彌陀仏の身体は百千万億の

万億・夜摩天・閻浮檀金色・仏身高・六十万億・那由他・恒河沙由旬・眉間白毫・右旋婉轉・如五

やまでん

な ゆ た ご う が し ゃ ゆ じ ゅ ん

ひ や く う

夜摩天の黄金のように輝き、高さは六十万億那由他恒河沙由旬である。眉間の白毫は、右周りで、大きさは須弥山五つ分である。み仏の眼は四つの海のように広く、澄みきっている。身体の毛穴からは光が出て、須弥山のようである。また、阿弥陀仏の頭の後ろにある円い光は、百億の三千大千世界の様である。

大千世界・於円光中・有百万億・那由他・恒河沙化仏・一一化仏・亦有衆多・無数化菩薩・以為その光の中に百万億那由他恒河沙の我々に合わせて変化されたみ仏がおられ、さらにそれぞれに菩薩が付き侍者・無量寿仏・有八万四千相・一一相・各有八万四千・隨形好・一一好・復有八万四千光明・添われている。阿弥陀仏は八万四千のすぐれた所がある。それぞれに八万四千のすぐれた特徴があり、それぞれに八万四千の光が放たれている。

一一光明徧照・十方世界・念佛衆生・攝取不捨・其光明相好・及与化仏・不可具說・但當憶想・

それぞれの光はすべての世界の念佛の人々を照らし、攝め取つて捨てる事がない。その光と特徴とみ仏について詳しく述べることができない。ただ深く想い、

りょうしんげんけん けんしじしゃ そっけんじっぽう いつさいしょぶつ いけんしょぶつこ みょうねんぶつさんまい さ せかんじしゃ みょうかんじつさいぶつしの  
令心眼見・見此事者・即見十方・一切諸仏・以見諸仏故・名念佛三昧・作是観者・名観一切仏身・

心の眼で見るのだ。これを見るものは、すべての仏がたを見るということだ。すべての仏がたを見るので、念佛三昧

と名付ける。この観ができればすべてのみ仏の姿を観ると言える。

いからんぶっしんこ やっけんぶっしん ぶっしんじしゃ だいじひせ いむえんじ せつしょしゅじょう さ しかんじしゃ しゃしんたせ しょうしょぶつ  
以觀仏身故・亦見仏心・仏心者・大慈悲是・以無縁慈・攝諸衆生・作此観者・捨身他世・生諸仏

み仏の姿が見えたのだからみ仏の心も見ることができる。み仏の心とは大慈悲心のことである。縁なきものも慈悲

の心ですくうだ。この観ができれば、いのちが終わり、次の生では、仏がたの前に生まれ、

ぜん とくむじょうにん ぜ こちしゃ おうどうけしん たいかんむりようじゅぶつ かんむりようじゅぶっしゃ じゅいちちそうじゅうこゆう たんかんみけんびやくじゅう  
前・得無生忍・是故智者・应当繫心・諦観無量寿仏・觀無量寿仏者・從一相好入・但觀眉間白毫・

空を悟る無生法忍を得ることができる。だから、智慧のあるものは、心を集中してはつきりと阿弥陀仏を想い描く

のだ。阿弥陀仏を想い描こうとする者は、一つの特徴から想い描くがよい。ただ眉間の白毫をはつきりと

じくりようみょうりよう けんみけんびやくじゅうしゃ はちまんしせんそうこゆう しねんとうげん けんむりようじゅぶっしゃ そっけんじっぽう むりようしょぶつ とっけん  
極令明了・見眉間白毫者・八万四千相好・自然當現・見無量寿仏者・即見十方・無量諸仏・得見

想い浮かべよ。それができれば、八万四千の特徴が自然と現れるはずだ。こうして阿弥陀仏を想い描けたなら、す

べての仏がたも観る事ができたことになる。

無量諸仏故・諸仏現前授記・是為偏觀・一切色身想・名第九觀・作此觀者・名為正觀・若他

あみだぶつ

ほとけ

ざようじや

しゃうかん

阿彌陀仏を觀る事ができたので、仏がたは目の前で行者が悟りを得ることを約束してくださる。これをすべての

仏がたを想い描く想といい、第九觀と名付ける。この觀ができれば正觀であり、

かんしゃ みょういじやかん

觀者・名為邪觀・

もし他を觀るならば邪觀である。」

正宗分 定善 観音觀・・・觀世音菩薩を想う

しょうしゆうぶん じょうせん かんのんかん

仏告阿難・及韋提希・見無量壽仏・了了分明已・次復當觀・觀世音菩薩・此菩薩身長・八十万億

しゃか

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「阿彌陀仏をはつきりと觀る事が出来たならば、次に

かんせおんぼさつ

ほさつ

觀世音菩薩を想い描くがよい。この菩薩は、身長は八十万億

那由他由旬で身體は金色である。頭には肉髻があり、後ろには直徑百千由旬の圓い光がある。その光の中に五百

む にぶつ いちいちけぶつ う ごひやっけぼさつ むりょうしょてん い いじや こしなうじゅう ご どうしゅじょう いっさいしきそう かいお

牟一尼仏・一一化仏・有五百化菩薩・無量諸天・以為侍者・拳身光中・五道衆生・一切色相・皆於

の私に似たみ仏がいる。それぞれのみ仏には、五百の菩薩と数え切れない程の天人が付き添っている。また、全身から放たれる光は、迷いの人々を照らし、その中に現れている。

中現・頂上毘楞伽・摩尼宝・以為天冠・其天冠中・有一立化仏・高二十五由旬・觀世音菩薩・面如

頭には素晴らしい宝玉で出来た冠をつけていて、その中に一人のお立ち姿のみ仏がおられ、高さは二十五由旬で

ある。觀世音菩薩のお顔は金色で、  
かんせおんばさつ こんじき

閻浮檀金色・眉間毫相・備七寶色・流出八万四千種光明・一一光明・有無量無數・百千化仏・  
えんぶだんこんじき みけんごうそう びしほうしき るすいはちまんしせんしゆこうみよつ いちいちこうみよつ うむりょうむしゆ ひやくせんけぶつ

三  
一

眉間の白毫は七つの宝の色で、八万四千の光明が放たれている。それぞれの光明には無数のみ仏がおられ、  
いちいちけふつ むしゅけぼさつ いじしゃ へんげんじさい まんじっぽうせかい ひによぐれんげしき うはちじゅうおくこうみよう いい  
一一化仏・無数化菩薩・以為侍者・变现自在・滿十方世界・譬如紅蓮華色・有八十億光明・以為

ほ  
と  
け

それぞれのみ仏にまた無数の菩薩が付き従う。変幻自在にすべての世界に満ちていて、紅の蓮華のようである。

かんせおんぼさつ

觀世音菩薩は、八十億の光の胸飾りをつけている。

卷之二

その中で極楽の様子を映し出し、手のひらには五百億の様々な蓮華色があり、十本の各指の先には、八万四千の

せんえ ゆによいんもん いちいちえ うはちまんしせんしき いちいちしき うはちまんしせんこう ごこうにゅうなん ふしようじつさい いしほう  
千画・猶如印文・一 一画・有八万四千色・一 一色・有八万四千光・其光柔軟・普照一切・以此宝

の印のような模様がある。それぞれの模様は八万四千色で、それぞれの色に八万四千の光が放たれている。その光は柔らかくすべてを照らしている。その手で

手・接引衆生・拳足時・足下有千輻輪相・自然化成・五百億光明台・下足時・有金剛摩尼華・

人々を導いている。足を上げたときは、足の裏には千輻輪相という車輪の模様があり、自ずと五百億の光の台となる。足を下ろしたときは、素晴らしい宝玉の花が、

ふさんいっさい まくふ みまん こ よしんそう しゅこうくそく によぶつ むい ゆ いちようじょう につけ さゆう むけんちようそう ふぎゅう せ そん せんぶくりんぞう  
布散一切・莫不弥滿・其余身相・衆好具足・如仏無異・唯頂上肉髻・及無見頂相・不及世尊・是

一面に散り埋め尽くす。その他はみ仏と同じである。ただ、頭の肉髻と頭頂部の高さがみ仏に及ばないだけだ。

いからん かんせおんぼさつ しんじつしきしんそう みょうだいじつかん ぶつこうあなん にやくうよつかん かんせおんぼさつしや どうさせ かん さ  
為観・観世音菩薩・真実色身想・名第十觀・仏告阿難・若有欲觀・觀世音菩薩者・當作是觀・作

これを観世音菩薩の姿を観る想といい、第十の觀とする。」お釈迦様は阿難尊者に仰せになりました。「もし、

かんせおんぼさつ かん かんせおんぼさつ  
観世音菩薩を想い描きたいという者はこの觀をするがよい。この觀をなせば

せかんしゃ ふ ぐしょか じょうじょうじょう じょむしゅこう しょうじせん によし ぼさつ たんもん ごみふう きやくむりょうふく がきょうたいいかん  
是観者・不遇諸禍・淨除業障・除無數劫・生死之罪・如此菩薩・但聞其名・獲無量福・何況諦觀・

様々な災いにあわず、悪い行いもさまたげとはならず、計り知れなく長い迷いの罪は除かれる。この菩薩は、名前を

聞くだけでも計り知れない功德が得られる。はつきりと観る事が出来たならばその功德はそれ以上だ。

にやくう よっかん かんせおんぼさつしゃ センカんちゅうじゅうにつけい しかんてんがん こ よしゅそう やくしたいかんし やくりょうみよつりよつ によかん ほさつ

若有欲觀・觀世音菩薩者・先觀頂上肉髻・次觀天冠・其余衆相・亦次第觀之・亦令明了・如觀

かんせおんぼさつ

もし觀世音菩薩を想い描こうとするならば、まず、頭上の肉髻を想い描き、次に冠を想い描きなさい。その他の特

徴の次々に想い描き、自分の手の中にあるように

しおうちゅう さ せかんしゃ みょういしようかん にやくたかんしゃ みょういじやかん

掌中・作是觀者・名為正觀・若他觀者・名為邪觀・

はつきりと観えるようにしなさい。これができれば正觀といい、そうでないなら邪觀という。

正宗分 定善 勢至觀

しおうじゅうぶん じょうぜん せいし じよくわん

・・・大勢至菩薩を想う

しぶおうかん だいせいしおうかん しおうかん しょうかん じやかん

次復應觀・大勢至菩薩・此菩薩・身量大小・亦如觀世音・圓光面各・百二十五由旬・照二百五十

かんせおんぼさつ

次にまた、大勢至菩薩を想い描くがよい。この菩薩の大きさは觀世音菩薩と同じだ。後ろの圓い光の直径は百二十一

五由旬で二百五十由旬を照らす。

ゆじゅん

由旬・拳身光明・照十方國・作紫金色・有緣衆生・皆悉得見・但見此菩薩・一毛孔光・即見十方・

ゆじゅん

全身から放たれる光は、すべての国を照らし、金色に輝いている。縁のある人々は皆「ことどく見ることができる。」

ちらの菩薩の一つの毛穴から放たれる光を見れば、

まりょうしょぶつ じぶつみょうこうみよつ ゼ ここう し ぼさつ みょうむへんこう いちえこう ふしょういつきり りょうりさんす とくむじょうりき ゼ  
無量諸仏・淨妙光明・是故号此菩薩・名無辺光・以智慧光・普照一切・令離三塗・得無上力・是

すべての仏がたの清らかな光を見る「」ことができる。だからこちらの菩薩を無辺光と名付ける。智慧の光ですべてを

照らし、地獄・餓鬼・畜生からすぐうこの上ない力を持つている。

ここう し ぼさつ みょうだいせいし し ぼさつてんがん う ごひやっぽう け いちいちほう け う ごひやっぽうだい いちいちだいちゅう じっぽうしょぶつ  
故号此菩薩・名大勢至・此菩薩天冠・有五百宝華・一一宝華・有五百宝台・一台中・十方諸仏・

だからこの菩薩を大勢至と名付ける。この菩薩の冠には、五百の宝の花がある。それぞれの花の中には五百の宝の台

がある。それぞれの台の中に、すべての仏がたの

じょうみょうこくと こうじょうしそう かいおちゅうげん ちようじょうにつけい によはずまけ おにつけいじょう う い ちほうびよう じょうしょこうみよつ ふ  
淨妙国土・廣長之相・皆於中現・頂上肉髻・如鉢頭摩華・於肉髻上・有一宝瓶・盛諸光明・普

清らかな国の様子がすべて映し出されている。頭上の肉髻は紅の蓮の花のようである。肉髻の上には、一つの宝の瓶

がある。そこから光があふれ、み仏のはたらきが表れる。

げんぶつじ よ しょしんそう よ かんせおん こ う む う い し ぼさつぎよつじ じっぽうせかい いっさいしんどう どうじどうしょ う ごひやくおく  
現仏事・余諸身相・如觀世音・等無有異・此菩薩行時・十方世界・一切震動・当地動歟・有五百億

3  
他は觀世音菩薩と同じである。この菩薩が歩く時、すべての世界は揺れ動く。動いた所に五百億の宝の花が咲く。  
宝華・一・宝華・莊嚴高頭・如極樂世界・此菩薩坐時・七寶國土・一時動搖・從下方・金光仏刹・  
ほうけ いちいちほうけ しょううこんこうけん によくらくせかい しほさつざじ しほうこくど いちじどうよう じゅうげほう こんこうぶつせつ

それぞれの美しさは、極楽浄土のようだ。この菩薩が座るとき、七つの宝の国土は震え、下は金光明の国からばさり

乃至上方・光明王仏刹・於其中間・無量塵數・分身無量壽仏・分身觀世音・大勢至・皆悉雲集

こうみようおうぶつ  
あみだぶつ  
かんぜおんばさつ  
だいせいしばさつ  
「へんくじょうど」

極樂國土·側塞空中·坐蓮華座·演說妙法·度苦衆生·作此觀者·名為正觀·若他觀者·名為邪

空中で蓮華座二座り、教えを説き、苦心む者をすくう。この観ができれば正観<sup>じょうかん</sup>、されば邪観<sup>じやかん</sup>。

觀・見大勢至菩薩・是為觀・大勢至・色身想・名第十一觀・觀此菩薩者・除無數劫・阿僧祇・生死

だいせいしばさつ だいせいしばさつ かん ぼさつ

されば、計り知れない迷いの罪が消える。

この觀を成せば、迷いの世に生まれず、常に仏がたの清らかな國にいる。この觀が完成することを、觀世音菩薩と

だいせいいしほさつ  
大勢至菩薩を完全に想い描いたと言える。

## 正宗分 定善 普觀・極樂に生まれた様子を想う

けんし じじ とうきじしん しょうおさいほう こくらくせかい おれんげこうそ されんげこうそ されんげかいそ れんげ  
見此事時・當起自心・生於西方・極樂世界・於蓮華中・結跏趺坐・作蓮華合想・作蓮華開想・蓮華  
「これを見る」ことができたならば、自分が往生する心を起<sup>おこ</sup>すがよい。西方極樂淨土に生まれ、蓮華の中で足を組

み、蓮華に包まれている様子を想い描き、次にその蓮華が開くのを想い描くがよい。蓮華が開くとき、

かいじ うごひやくしつこう らいしょうしんそう げんもくかいそう けんぶつぼさつ まんこくじゅう すいちようじゅりん ぎゅう よしょぶつ しょすいおんじょう  
開時・有五百色光・來照身想・眼目開想・見仏菩薩・滿虛空中・水鳥樹林・及与諸仏・所出音声・

五百の光が放たれ、自分を照らすのを想がよい。目を開くと、み仏や菩薩が空中に満ちているのを見るであろう。

せせらぎも鳥の鳴き声も樹々のざわめきも仏がたの声も皆、

かいえんみょうほう よじゅうにぶきょうこう しゆつじょうしじ おくじふしつ けんしじ みょうけんむりようじゅぶつ こくらくせかい ぜいふ  
皆演妙法・与十二部經合・出定之時・憶持不失・見此事已・名見無量壽仏・極樂世界・是為普

尊い教えを説いておられ、すべてのお經と合つてゐる。この觀<sup>かん</sup>を終えてからも、よく覚えて忘れる「とのないよう」にし

なさい。これらが終ると阿弥陀仏の極樂淨土を見たと言える。これを普觀想い、

かんそう みょうたいじゅうにかん むりょうじゅぶつ けしんむしゅ よかんせおん だいせいし じょうらじし きょうにんしょ  
觀想・名第十二觀・無量壽仏・化身無数・与觀世音・大勢至・常來至此・行人之所・

第十二觀という。阿弥陀仏は無数に姿を現され、觀世音菩薩と大勢至菩薩と共にこの行者の所においてになる。<sup>36</sup>

## 正宗分 定善 雜想觀：一丈六尺の阿弥陀仏像を想う

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「もし心から西方に生まれたいと思うのならば、まず池の

上に一丈六尺の阿弥陀仏像を想い描くがよい。先程説いた阿弥陀仏の

大きさは計りしれず、凡夫では到底想うことはできない。しかし、阿弥陀仏の願いの力によつて、深く想うならば必ず成就するであろう。ただ仏像を想うだけで無量の功德を得られるのだ。

量福・何況観仏・具足身相・阿弥陀仏・神通如意・於十方国・变现自在・或現大身・満虛空中・或

ましてすべての特徴を想い描くのだからこれ以上ない功德を得られる。阿弥陀仏は意のままに神通力を操り、すべ

ての国に変幻自在に現れる。また、空中に大きく姿が満ちていることもある。また、一丈六尺や

現小身・丈六八尺・所現之形・皆真金色・円光化仏・及宝蓮華・如上所説・觀世音菩薩・及大勢

はのしゃく こんじき

けしん

かんぜおんぼさつ だいせいしほさつ

八尺の時もある。すべて金色である。円光の化身や宝の蓮華は先に説いた通りだ。觀世音菩薩と大勢至菩薩も至・於一切處身同・衆生但觀首相・知是觀世音・知是大勢至・此二菩薩・助阿彌陀仏。

ど二も同じ姿をしている。人々は、頭の特長で、觀世音菩薩や大勢至菩薩を見分けることができる。この二菩薩は

## 普化一切・是為雜想觀・名第十三觀・

阿彌陀仏を助け、あらゆるもの導く。これを雜想觀といい、第十三觀と名付ける。」

### 正宗分 散善 上上品・上品上生について

佛告阿難・及韋提希・上品上生者・若有衆生・願生彼國者・發三種心・即使往生・何等為三・一者

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せになりました。「上品上生とは、もし極樂淨土に生まれたいと願うも

のは、三種の心を起こして往生をする。一つには至誠心、

二つには深心、三つには回向發願心である。これらを具える者は必ず極樂淨土に生まれる。また、三種の行を修め

るものは往生をすることができる。その三種とは、

おうじょう

じんしん

えこう ほつかんしん

べくらくじょうど

一者慈心不殺・具諸戒行・二者誦誦大乘・方等經典・三者修行六念・廻向發願・願生彼國・具此

一つには慈しみの心でむやみに殺さず戒を守つて修行をする者、二つには大乘經典を称える者、三つには仏・法・

僧・戒・施・天の六念の行を修める者である。この功德をもつて極樂淨土に生まれたいと願い、

功德・一日乃至七日・即得往生・生彼國時・此人精進勇猛故・阿弥陀如來・与觀世音・大勢至・

一日から七日の間この功德を積むのならば直ちに往生ができる。極樂淨土に生まれる時、この者が懸命に努力を

したので、阿弥陀仏は觀世音菩薩と大勢至菩薩、

無数化仏・百千比丘・声聞大衆・無数諸天・七寶宮殿・觀世音菩薩・執金剛台・与大勢至菩薩・至

数え切れない仏がた、百千の修行者や声聞達、数え切れない天人達が七つの宝で出来た宮殿と共においでになる。觀世音菩薩は金剛の台をささげて、大勢至菩薩と共に

行者前・阿弥陀仏・放光明・照行者身・与諸菩薩・授手迎接・觀世音・大勢至・与無数菩薩・讚

その者の前においでになる。阿弥陀仏は大いなる光を放ちその者の身を照らし、菩薩たちと共に手を差し伸べてお迎えになる。觀世音菩薩と大勢至菩薩は、数え切れない菩薩達と共にその者を讚え、

だんきょうじや かんじんごしん ぎょうじやけんに かんぎゅやく じけんごしん じよしこんごうだい すいじゅぶつご によだんじきょう おうじょう ひこく  
歎行者・勸進其心・行者見已・歎喜踊躍・自見其身・乗金剛台・隨從仏後・如彈指頃・往生彼國・

その心を励まされる。その者は来迎を見て躍り上がつて喜び、自分を見ると金剛の台に乗り、み仏の後に続き、指

を弾く間に極樂淨土に往生する。すると、

しょうひくい けんぶしきしん しゅうそうくそく けんしょほさつ しきそうくそく こうみよほうりん えんせつみよほう もんにそくご むしょうぼう  
生彼國已・見仏色身・衆相具足・見諸菩薩・色相具足・光明宝林・演說妙法・聞已即悟・無生法

あみだぶつ  
阿弥陀仏の様々な特徴と菩薩たちの特徴を見る。光の宝の林が仏法を説き、聞き終わると空を悟る。

にんきょうしゆゆけん りやくじしょぶつ へんじっぽうかい おしょぶっせん しだいじゅき げんどうほんごく とくまりようひやくせん だらにもん  
忍・經須臾間・歴事諸仏・徧十方界・於諸仏前・次第授記・還到本国・得無量百千・陀羅尼門・

わづかな間に仏がたの世界を見てまわり、すべての世界を周り、諸仏から悟りを得ることを約束される。極樂

じょうう  
淨土に還つてくると、計り知れない善を行う道を得る。

ぜみよしおほんじょうしよう  
是名上品上生者。

じょうばんじょうしよう  
これを上品上生と名付ける。

じょうばんじょうぶん さんせん じょうちりょうほん  
正宗分 散善 上中品・上品中生について

じょうばんちゅうしょうじや ふひつじゅじとくじゅ ほうどうきようでん せんげ きしゅ おたいいちき しんぶきようどう じんしんいんが ふほうたいじょう  
上品中生者・不必受持誦誦・方等經典・善解義趣・於第一義・心不驚動・深信因果・不謗大乘・

次に上品中生とは、必ずしも大乗經典を称えているとは限らないが、意味をよく理解して、真理を聞いても心40

は動じない。物事の因果を深く信じて、大乗の教えを謗らす

いんが  
だいじょう  
そし  
この功德をもつて極楽淨土に生まれたいと願う。この行を行う者が命を終える時、阿弥陀仏は觀世音・大勢至・無量大衆・

この功德をもつて極楽淨土に生まれたいと願う。この行を行う者が命を終える時、阿弥陀仏は觀世音菩薩と

この功德をもつて極楽淨土に生まれたいと願う。この行を行う者が命を終える時、阿弥陀仏は觀世音菩薩と

この功德をもつて極楽淨土に生まれたいと願う。この行を行う者が命を終える時、阿弥陀仏は觀世音菩薩と

眷属围绕・持紫金台・至行者前・讚言法子・汝行大乘・解第一義・是故我今・來迎接汝・与千化

囲まれて、金の台座を従者に持たせその者の前に現れる。そしてその者を讃える。「み仏の子よ、そなたは大乗の行

をよく行い、眞実を理解する。だから、私は今ここにきてそなたをわが国に迎えよう。」と。そして千の仏がたが

仏・一時授手・行者自見・坐紫金台・合掌叉手・讚歎諸仏・如一念頃・即生彼國・七宝池中・此紫

いつせいに手を差し伸べる。その者が自分の姿を見ると、金の台座に座っている。合掌し仏がたを讃えると、たちまち

極樂淨土の七つの宝の池の中に生まれる。この金の台座は

こんだい  
によだいほうけ  
きようしゆくそつかい  
きようじやんさ  
しまこんじき  
そくげやくう  
しつぼうれんげ  
ぶつきゅうほさつ  
くじほうこうみよう  
金台・如大宝華・經宿則開・行者身作・紫磨金色・足下亦有・七寶蓮華・仏及菩薩・俱時放光明・

大きな宝の花のようである。一晩過ぎると花が開く。その者の身体は金色に輝き、足元には七つの宝の蓮華がある。

み仏や菩薩が光を放つて  
ほとけ  
ぼさつ

しょくぎみつじやん もくそくかいみよう いんせんしょくじゅう ふもんしょくじゅう じゅんせつじんじん だいいちきたい そくげこんだい らいぶつがっしょう さんだんせ  
照行者身・目即開明・因前宿習・普聞衆声・純說甚深・第一義諦・即下金台・礼仏合掌・讚歎世

その者を照らすと、目が開いてはっきりと見えるようになる。前に大乗の教えを聞いていたので、極楽浄土の様々な

音が聞こえる。それらは、深い真実を説いている。その者は台座を下りてみ仏に合掌し礼拝して讚える。

尊。經於七日。應時即於阿耨多羅三藐三菩提。得不退軖。應時即能飛行。徧至十方。歷事

七日が経つと、この上ない悟りから、もう落ちることはない位に至り、時に空中を飛行して、自由に移動し  
しょふつ お しょぶつしょ しゅしょさんまい きょうへいちしょうこう とくむしょうにん げんせんじゅき ぜみゅうじょうほんぢゅうしょうしゃ  
諸仏・於諸仏所・修諸三昧・經一小劫・得無生忍・現前授記・是名上品中生者・

ほとけ  
仏がたによく仕え、禪定を修行する。一小劫を経て、空を悟り、仏がたに悟りを得ることを證明される。これ  
じょうほんちゅうじょう  
を上品中生の者と名付ける。

正宗分 散善 上下品…上品下生について

上品下生者・亦信因果・不謗大乘・但發無上道心・以此功德・迴向願求・生極樂國・行者命欲  
じょうほんげじょうしゃ やくしんいんが ふほうだいじょう たんぼつむじょうどうしん いしきどく えこうがんぐ しううくらつこく ぎようじやみようよくよ

次に上品下生といふのは、因果を信じ、大乗仏教を謗らず、ただ悟りを求める心を起し、その功德によつて極淨土に生まれたいと願う者のことだ。その者の命が終わるときに、

じゅうじゅうど  
終時・阿弥陀仏・及觀世音菩薩は、多くの聖者達に金の蓮華を持たせて、五百のみ仏を出現させその者を迎える。五百のみ仏は

あみだぶつ・かんぜおんぼさつ・だいせいしぶさつ・よしょけんぞく・じこんれんげ・けさこひやつけぶつ・らいこうしにん・ごひやつけぶつ  
阿弥陀仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩は、多くの聖者達に金の蓮華を持たせて、五百のみ仏を出現させその者を

じゅうじゅうど  
迎える。五百のみ仏は

いちじゅうしゆ・さんごんほうし・によこんしょうじゅう・ほつむじょうどうしん  
一時授手・讚言法子・汝今清淨・發無上道心・我來迎汝・見此事時・即自見身・坐金蓮華・坐已華

いつせいに手を差し伸べ、「み仏の子らよ、そなたは今清らかでこの上ない悟りを求める心を起した。だから私はこ

こにそなたを迎えたのだ」これを見たとき、その者は自身を見ると、金の蓮華に座つてゐる。そして花は閉じて、  
ごうすいせせんごそくとくおうじゅうしつぼうちちゅういちにちいちゃれんげないかいしちにちしちゅうないとくけんぶつすいけんぶつしんおしゆ  
合・隨世尊後・即得往生・七寶池中・一日一夜・蓮華乃開・七日之中・乃得見仏・雖見仏身・於衆

み仏の後に続き、極樂淨土の七つの宝の池の中に生まれる。一日一夜が過ぎると、花が開き、七日のうちにみ仏を

見ることができる。けれども、

相好・心不明了・於三七日後・乃了了見・聞衆音声・皆演妙法・遊歷十方・供養諸仏・於諸仏前・

はつきりと見ることができない。二十一日経つと、はつきりと見ることができる。様々な音は皆素晴らしい教えを説いて

ていると聞こえる。すべての世界をめぐり、仏がたを供養し、  
ほどけ くよう

もんじんじんぼう きようせんじょへう とくひやうぼうみょうもん じゅかんきし せみょうじょうばんげしょうしゃ せみょうじょうはいしょうそう みょうだいじゅうしかん  
聞其深法・経三小劫・得百法明門・住歡喜地・是名上品下生者・是名上輩生想・名第十四觀・

奥深い教えを聞くことができるのである。三小劫を経て、百の智慧を得て、聖者に入る喜びを得る歡喜地に入る。これを

じょうばんげしょう じょうじう じょうじや  
上品下生と名付ける。これを上輩生想といい、第十四觀と名付ける。」

## 正宗分 散善 中上品・中品上生について

ぶつこうあなん ぎゅういだい ちゅうばんじょうしょうしゃ にやくう しょじょう じゅじこかい じはつかいさい しゃぎょうしょかい ふぞうこきやく むしゅか  
仏告阿難・及韋提希・中品上生者・若有衆生・受持五戒・持八戒齋・修行諸戒・不造五逆・無衆過

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「中品上生」というのは、もし殺さず、盜まず、浮氣せず、

嘘を言わず、酒を飲まずの五戒を守り、特定の日に五戒に加え床で寝る、午後から食事を取らず、歌を聞かず化

はっさいかい  
お

粧をしないという八戒戒を守り、その他の戒律も守り、父殺し、母殺し、聖者殺し、み仏を傷つける、仏教教団を

ござやく

破壊するという五逆の罪を造らず、他の過ちを犯すこともなく、  
ほどけ ふきょう

げん いしせんこん えこうがんぐ しようおさいほう こくらくせかい りんみょうじゅじ あみだぶつ よしょびく けんそくいによう ほうこん  
患・以此善根・廻向願求・生於西方・極樂世界・臨命終時・阿弥陀仏・与諸比丘・眷屬围绕・放金

この功德をもつて西方極樂淨土に生まれたいと願う者のことだ。その者が命を終えようとする時、阿弥陀仏は多く

あみだぶつ

44

の修行者や聖者に囲まれて、金色の光を放つて

じきこう しごにんしょ えんせつくく むじょう むが さんだんしゅつけ とくりしゃく きょうじやけんに しんだいかんき じけんこしん さ  
その者の所においてになる。そして苦・空・無常・無我をお説きになり、出家をして諸々の苦を離れることができうるの

を褒め称えられる。その者はこの様子を見ると、大いに喜び、自らを振り返ると

れんげだい じょうきがっしょう いぶつさらい みこすきょう そくとくおじょ いくらくせかい れんげじんかい とうけふじ もんしゅおんじょう  
蓮華台・長跪合掌・為仏作礼・未拳頭頃・即得往生・極樂世界・蓮華尋開・當華敷時・聞衆音声・

蓮華の台座に座っている。跪いて合掌しみ仏に礼拝すると、まだ頭を上げないうちに極樂淨土に往生し、蓮の花が

開く。花が開くときには、諸々の音が聞こえ

さんだんしたい おうじそくとく あらかんどう さんみようろくつう ぐはちげだつ せみようちゅうばんじょうしょうしゃ  
讃歎四諦・應時即得・阿羅漢道・三明六通・具八解脱・是名中品上生者・

人生は苦であり、苦の原因は煩惱であり、それを滅すると涅槃寂靜の悟りの境地であり、そのためには八つの正しい

道がある四諦を讃えるのが聞こえる。その時阿羅漢道を得て、過去未來現在が見える三明と六つの神通力で八種

の禪定を得ることができる。これを中品上生と名付ける。

せんじょう

しそうじや

あらかんどう

さんみよう

じんずうりき

ちゅうばんじょうしょう

ばんのう

ねほんじやくじょう

しだい

あらかんどう

さんみよう

じんずうりき

正宗分 散善 中中品

中品中生者・若有衆生・若一日一夜・受持八戒齋・若一日一夜・持沙弥戒・若一日一夜・持具足

ちゅうばんちゅうじょう

中品中生というのは、もし一日一夜の間八齋戒を守り、あるいは沙弥戒を守り、あるいは具足戒を守り、

かい いきむけつ いしへく えこうがんぐ しなうじくふへい かこううくんじゅ によしきようじや みようよくじゅじ けんあみだぶつ よ

戒·威儀無欠·以此功德·迴向願求·生極樂國·戒香熏修·如此行者·命欲終時·見阿彌陀佛·與

行いを乱さない者が、その功德をもつて極楽淨土に生まれたいと願う。この徳が身に備わった者は、命が終わろうと

あ  
み  
だ  
ぶ  
つ  
  
しょ、うじや

する時、阿弥陀仏が多くの聖者と共に現れ、

しょけんぞく ほうこんじきこう じしつぼうれんげ しぎょうじやせん

諸眷屬放金色光持七寶蓮華至行者前行者自聞空中有聲讚言善男子如汝善人隨順三

114

金色の光を放ち、七つの宝で出来た蓮華を持たせてその者の前に現れる。その時、空中からお褒めの声が聞こえてくる。【善良な者よ、そなたは善き者だ。過去現在未来の

世・諸仏教故・我來迎汝・行者自見・坐蓮華上・蓮華即合・生於西方・極樂世界・在寶池中・經於  
ぜ  
しょふうきょう  
がらくこうによ  
ぎようしゃじけん  
ざれんねじょう  
れんげそくごう  
しょうおさくはう  
こくらくせかい  
さいほうちゅう  
きょうお

仏がたの教えによく従つたので、私はそなたを迎えて来た。】その者が自らを見ると蓮華の上に座つてゐる。すぐに

蓮華は閉じて、西方極楽浄土に生まれ、宝の池の中にいる。七日が経つと

七日・蓮華乃敷・華既敷已・開目合掌・讚歎世尊・聞法歡喜・得須陀洹・經半劫已・

はんこう

しゅだおん

ほどけ

がつしょう

じょう

蓮の花が開く。すると目が開き、合掌してみ仏を讚え、教えを聞いて喜び、須陀洹の位に至る。半劫を経て、

成阿羅漢・是名中品中生者。

あらかん

あらかん ぜみようちゅうばんけ

阿羅漢になる。これを中品中生と名付ける。

あらかん

あらかん ちゅうばんけほん

正宗分 散善 中下品・中品下生について

中品下生者・若有善男子・善女人・孝養父母・行世仁慈・此人命欲終時・遇善知識・為其広説・

次に中品下生というのは、もし善き者がいて、親孝行をし、思いやりの心を持つものがいる。その者が命を終えよう

とする時、善知識に偶い、その者の為に、

阿弥陀仏・國土樂事・亦説法藏比丘・四十八願・聞此事已・尋即命終・譬如壯士・屈伸臂頃・即生

阿弥陀仏の極樂淨土の様子や法藏菩薩の四十八の願いを説く。これを聞き、命を終えると、譬如えば若者がひじを

曲げるようなわざかな間に、極樂淨土に生まれる。

西方・極樂世界・生經七日・遇觀世音・及大勢至・聞法歡喜・經一小劫・成阿羅漢・是名中品下

かんぜおんぼさつ　だいせいしほさつ

しょうこう

あらかん

ちゅうばんげしょう

七日経つと観世音菩薩と大勢至菩薩に遇い、教えを聞いて喜び、一小劫を経て、阿羅漢となる。これを中品下生と名付ける。中輩生想といい、第十五觀と名付ける。」

## 生者・是名中輩生想・名第十五觀・

### 正宗分 散善 下上品・下品上生について

仏告阿難・及韋提希・下品上生者・或有衆生・作衆惡業・雖不誹謗・方等經典・如此愚人・多造衆

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「下品上生とは、こういう者のことだ。諸々の惡を為すが、

大乗の經典をけなすようなことはしない。このような愚かな者は多くの惡を犯しても

恥じることはない。その者が命を終えようとすると、善知識に遇い、大乗經典の題名を讃えるのを聞く。

悪・無有慙愧・命欲終時・遇善知識・為讃大乘・十二部經・首題名字・以聞如是・諸經名故・除却

千劫・極重惡業・智者復教・合掌叉手・称南無阿彌陀仏・称仓名故・除五十億劫・生死之罪・

そうすると、千劫の極重の惡の罪が除かれる。また善知識は、合掌し南無阿彌陀仏と称えることを教える。そうすると、五十億劫の迷いの罪が除かれる。

にじひぶつ せつけんけぶつ けかんせおん けだいせいし しきょうじやせん さんこんせんなんし によしょうぶつみょうこ しょざいしょうめつ がら48  
爾時彼仏・即遣化仏・化觀世音・化大勢至・至行者前・讚言善男子・汝称仏名故・諸罪消滅・我來

あみだぶつ

かんせおんぼさつ

だいせいしょばさつ

こうによ させこい さふうじやせつせん けふつこうみょう へんまんこしつ けんにかんき そくへんみょうじゅ じょうぼうれんげ すいけぶつこ しょう

迎汝・作是語已・行者即見・化仏光明・徧滿其室・見已歡喜・即便命終・乘宝蓮華・隨化仏後・生

【善良な者よ。そなたは、み仏の名を称えたことにより、諸々の罪が消えた。私は(ニ)に来てそなたを迎えて来

た。】この言葉が終わると、その者はみ仏の光明が部屋中に溢れているのを見る。見終わると喜び命が絶え、宝の蓮華に乗り、み仏の後に従い、極樂淨土の宝の池の中に生まれる。

宝池中・經七七日・蓮華乃敷・當華敷時・大悲觀世音菩薩・及大勢至・放大光明・住其人前・為説  
四十九日が経つと蓮華が開く。その時、大悲の觀世音菩薩と大勢至菩薩は光を放ちその者の前に現れ、深い經典  
甚深・十二部經・聞已信解・發無上道心・經十小劫・具百法明門・得入初地・是名下品上生者・

の教えをお説きになる。これを聞き、信じよく理解して、この上ない悟りを求める心を起こす。すると、十小劫を

経てすべてを悟る智慧を身につけ、初地の位に至る。これを下品上生と名付ける。

得聞仏名法名・及聞僧名・聞三宝名・即得往生・

また、仏・法・僧の三宝の名を聞くことができた者もただちに極樂淨土に生まれるのだ。」

## 正宗分 散善 下中品

### 下品中生について

ふつごうあなん さんせん けちゅうほん  
仏告阿難・及韋提希・下品中生者・或有衆生・毀犯五戒八戒・及具足戒・如此愚人・偷僧祇物・  
お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「下品中生というのは、五戒や八戒や具足戒を破つてゐる  
者がいる。」のような愚かな者は、教団の共有物を奪い、お供えを盗み、

とうげんせんぞうもつ ふじょうせつぼう むうさんき  
盜現前僧物・不淨說法・無有慙愧・以諸惡業・而自莊嚴・如此罪人・以惡業故・應墮地獄・命欲  
欲にまみれた教えを説き恥じることなく、さらにそれらの悪行を誇つてやえいる。」のような罪人は、その悪行の

為に、地獄に墮ちる。その者が命を終える時、

じゅじ じごくしゅか いちじくし ぐうせんぢしき  
終時・地獄衆火・一時俱至・遇善知識・以大慈悲・為說阿彌陀仏・十力威德・廣說彼仏・光明神

ぜんちしき

だいじひ

あみだぶ

あみだぶ

あくきょう

地獄の業火が、いつせいに迫るけれども、善知識に遇い、大慈悲をもつて阿彌陀仏のすぐれたお徳と、光の力を説き、  
りき やくさんかいじょうえ けたつけたつちけん しにんもんに じよはぢゅうおつこう しょうじしき  
力・亦讚戒定慧・解脱解脱知見・此人聞已・除八十億劫・生死之罪・地獄猛火・化為清涼風・吹諸  
すいしょ

また、戒・定・慧・解脱・解脱知見を讃えるのを聞く。その者が聞き終わると、八十億劫の迷いの罪が消える。地獄の

おつこう

50

猛火は、清らかな風に変わり、美しい花を舞い散らす。

天華・華上皆有・化仏菩薩・迎接此人・如一念頃・即得往生・七宝池中・蓮華之内・經於六劫・蓮花の上には皆、み仏や菩薩がおいでになり、その者を迎える。すると、たちまちに極楽淨土に生まれることが出来る。

七つの宝の池の中の蓮の花に包まれ、六劫を経て花が開く。

華乃敷・當華敷時・觀世音・大勢至・以梵音声・安慰彼人・為說大乘・甚深經典・聞此法已・

その時、觀世音菩薩と大勢至菩薩は清らかな声で、その者を心安らかにし、大乗の深い教えをお説きになる。

応時即発・無上道心・是名下品中生者・

聞き終わると、この上ない悟りを求める心を起こす。これを下品中生の者と名付ける。」

正宗分 散善 下下品・下品下生について

仏告阿難・及韋提希・下品下生者・或有衆生・作不善業・五逆十惡・具諸不善・如此愚人・以惡業

ぶつこうあなん

きゆういたいけ

けほんげ

さふせんこう

ごきやくじりうあく

ぐしょふせん

によしぐにん

いあくこう

しゆうしゅうぶん

さんせん

けけほん

お釈迦様は阿難尊者と韋提希夫人に仰せられました。「下品下生」といふのは、五逆十惡を行い、諸々の惡を犯し

ている。このよ<sup>う</sup>な愚かな者は、その報いで

故・應墮惡道・經歷多劫・受苦無窮・如此愚人・臨命終時・遇善知識・種種安慰・為說妙法・教令

悪い世界に墮ちる。計り知れない長い時間をかけて、極まりない苦しみを受ける。このよ<sup>う</sup>な愚かな者が命を終え

ようとする時、善知識に遇い、いろいろと心安らぐ教えを聞き、み仏を念じることを教えられる。

念仏・此人苦逼・不違念仏・善友告言・汝若不能念者・應称無量壽仏・如是至心・令声不絕・具足

しかし、その者は臨終の苦しみでみ仏を念じることができない。善知識は言われた。「そなたがもし、念じることが

できなければ、無量壽仏の名を称えなさい。」こうして、その者が、心から声を続けて

十念・称南無阿弥陀仏・称仓名故・於念念中・除八十億劫・生死之罪・命終之時・見金蓮華・

南無阿弥陀仏と十回称えると、そのことにより、八十億劫の迷いの罪が消える。命が終わると、金の蓮華が

猶如日輪・住其人前・如一念頃・即得往生・極樂世界・於蓮華中・滿十二大劫・蓮華方開・觀世

太陽のように輝き、その者の前に現れるのを見ると、すぐに極楽淨土に生まれることが出来る。蓮の花に包まれて、52

十二大劫が経つと、花が開く。觀世音菩薩と  
だいじごう だいこう かんせおんぼさつ

音・大勢至・以大悲音声・為其廣說・諸法實相・除滅罪法・聞已歡喜・應時即發・菩提之心・  
だいせいしほさつ だいじひ おん だいせいし いだいひおんじょう いここうせつ しょほううじっそう じよめつさいほう もんにかんき おうじそくはつ ばだいしん

大勢至菩薩は大慈悲の声でその者の為に、世界の見方と罪を除く教えを説かれる。その者はそれを聞き、喜び悟りを求める心を起す。

是名下品下生者・是名下輩生想・名第十六觀・  
ぜみようげほんげしようしゃ みようげはいしようそう みようだいじゅうろっかん

これを下品下生の者といふ。これらを下品の往生の想といふ、第十六觀と名付ける。」  
げほん おうじょう

得益分・利益を得る  
とくやくぶん

說是語時・韋提希・與五百侍女・聞仏所說・應時即見・極樂世界・廣長之相・得見仏身・及二菩  
せつぜこじいだいけ よごひやくじによ もんぶつしょせつ おうじそっけん ごくらくせかい こうじょうしそう とっけんぶつしん ぎゅうにほ

お釈迦様がこのようにお説きになると、韋提希夫人は五百人の侍女と共にお釈迦様の教えを聞いて、すぐに極楽  
しゃか

淨土の広大な光景を見ることができました。阿彌陀仏や觀世音菩薩や大勢至菩薩も拝見することができました。  
じょうど

心から喜び、これほどまでに尊いのものはないと讚え、迷いが晴れて、空の悟りを得ました。五百人の侍女もこの上ない悟りを求める心を起<sup>こ</sup>して、極楽淨土に生まれたいと願いました。

## 國・世尊悉記・皆當往生・生彼國已・得諸仏現前三昧・無量諸天・發無上道心・

お釈迦様は悉く約束されました。皆往生し、極楽淨土に生まれ、諸仏が現れ成仏を予告されました。数え切れない天人達もこの上ない悟りを求める心を起<sup>こ</sup>しました。

## 流通分・阿難尊者がこの教えの要は何かを問う

爾時阿難・即從座起・前白仏言世尊・當何名此經・此法之要・當云何受持・仏告阿難・此經名

その時阿難尊者は立ち上がり、お釈迦様の前に進み申し上げました。「お釈迦様、この教えは何と名付けましよう

か。」この教えの要はどのように保てばよいでしょうか。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。「この教えは觀・極樂淨土・無量壽仏・觀世音菩薩・大勢至菩薩・亦名淨除業障・生諸仏前・汝當受持・無令

【極樂淨土と無量壽仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩を觀ずる經】と名付け、また【これまでの罪を除き、仏がたの

前に生まれる經】と名付ける。そなたはこの教えを保ち、忘れることがないように。

もうしつ きょうう し さんまいしや げんしんとつけん むりょうじゅぶつ きゅううに だいじ にやくせんなんし せんによん たんもんぶつみよう に ぼさつみみよう じ4  
忘失・行此三昧者・現身得見・無量寿仏・及二大士・若善男子・善女人・但聞仏名・二菩薩名・除

ほどけ

さんまい

むりょうじゅぶつ

かんせおんぼさつ だいせいしほさつ

だいせいしほさつ

かんせおんぼさつ だいせいしほさつ

かんせおんぼさつ だいせいしほ

じ5

このみ仏を觀る三昧を行う者は、この世で無量寿仏と觀世音菩薩と大勢至菩薩の名を拝見することができる。もし善良な者達が、ただ無量寿仏の名と觀世音菩薩と大勢至菩薩の名を聞くだけでも、

むりょうじゅぶつ かんせおんぼさつ だいせいしほさつ  
むりょうじゅぶつ かんせおんぼさつ だいせいしほさつ  
むりょうじゅぶつ かんせおんぼさつ だいせいしほ

無量劫・生死之罪・何況憶念・若念仏者・當知此人・是人中・分陀利華・觀世音菩薩・大勢至菩

計り知れない迷いの罪が除かれるのだから、念ずるならばなおさらである。もし念仏する者は、知るがよい。その者は、白く清らかな蓮華のような尊い人である。觀世音菩薩と大勢至菩薩は

かんせおんぼさつ だいせいしほさつ

ねんぶつ

勝れた友となり、悟りの場に座り、諸仏の家である極樂淨土に生まれる。」お釈迦様は阿難尊者に仰せられました。

「そなたはしっかりと心にとどめておくがよい。心にとどめるとは、無量寿仏の名をとどめるということだ。」

しゃか

あなんそんじや

おりょうじゅぶつ  
ぶっせつ

此語時・尊者目犍連・阿難及韋提希等・聞仏所說・皆大歡喜・  
お釈迦様が説かれた時、目連尊者や阿難尊者、韋提希夫人達はこれを聞き、皆大いに喜んだのです。

しゃか

もくれんそんじや  
あなんそんじや

いだいけぶにん

耆闍分・お釈迦様が耆闍崛山に帰り、教えを説く

きしゃぶん

にじせそんそくぶこくげんぎしゃくつせんにじあなんこういだいしゅうせつによじようじむりようしょてんぎゅうりゅうやしゃ  
爾時世尊・足歩虚空・還耆闍崛山・爾時阿難・広為大衆・説如上事・無量諸天・及竜夜叉・

しゃか

さしゃくせん

あなんそんじや

しゃか

その時、お釈迦様は空中を歩んで耆闍崛山にお帰りになられました。阿難尊者は大衆の為にお釈迦様の教えを説

き、計り知れない天人達や龍や夜叉も、

もんぶつしょせつかいだいかなりいぶつにたい

聞仏所一説・皆大歡喜・礼仏而一退

教えを聞いて喜び、お釈迦様に礼拝して帰りました。

ぶつせつかんむりようじゅきょう

仏説観無量寿經 キン一打

○南無阿彌陀仏 ○南無阿彌陀仏×5

願以此功德 ●平等施一切同發菩提心 往生安樂國

どうかこの阿彌陀如來の功德によつて 平等に届く阿彌陀如來の御名を聞き 共にこれをよろこび 安樂(極樂)  
淨土に、往生させていただきましよう

キン二打 経本を頂く・合掌・礼拝

かんむりようじゅきょう

## 觀無量壽經とは

じょうどさんぶきょう

淨土三部經の一つで「觀經」とも言います。

古代インドのマガダ国の首都王舍城で阿闍

おうしゃじょう

あじや

世王子が父を殺し、母を軟禁するという事

件が起きました。今でいう家庭内暴力が起

きたのです。

いだいけふにん

しゃか

母の韋提希夫人がお釈迦様にすくいを求

あみだぶつ

いへんくじょうぶ

め、阿弥陀仏の極樂淨土に生まれたいと願

しゃか

います。お釈迦様はその方法を説かれ、そ

なもあみだぶつ

れができない者のために南無阿弥陀仏と念

仏を称える事を勧められます。

読み方などわからない場合は、YOUTUBE  
「西光寺チャンネル」を参考にして下さい。その

他の勤行・節談説教・紙芝居・アニメも配信して

## 西光寺チャンネル



## 淨土真宗本願寺派西光寺

千葉県市原市根田七二三一

TEL ○四三六一二二一七四二一

✉ saikohji@saikohji.net

HP 「市原市 西光寺」で検索かQRで



西光寺HP